

下岩瀬の名物庄屋と石川清秋

◇下岩瀬村庄屋・中崎藤兵衛

幕末の水戸藩領農村を絵と文で活写した水戸藩士・加藤寛斎。寛斎の残した記録の中でもとりわけ有名な「常陸国北郡里程間数之記」（国立国会図書館蔵）には、常陸大宮市のうち大宮地域と山方地域が数多く描かれています。寛斎は名所や農村風景のほかにも、地域に貢献し、人々のためにそして藩のために働いた人物に深い共感を寄せ、その人物評を書き残しました。

その一人が、下岩瀬村（下岩瀬）の庄屋を務めた中崎藤兵衛です。庄屋役だけでなく、のちに数ヶ村を差配する山横目にもなった藤兵衛は、裕福だった自らの資産を貧しい人たちに分け与え、自分では贅沢をすることなく、衣食住すべて質素に生活していました。夏は畳をはいだ板の間に筵を敷いて一家ともに過ごし、客間の畳も一般の備後表よりも簡素な琉球畳を使用していました。また、苗字帯刀を許されたあとも、村々を回るのに供を連れず一人で、腰に荷物をぶら下げて闊歩する気さくな人柄で親しまれたようです。

藤兵衛は江戸時代人としては長命で、96歳の天寿を全うします。藤兵衛の人柄を慕い、93歳のお祝いには、水戸藩士からも祝いの品が贈られました。

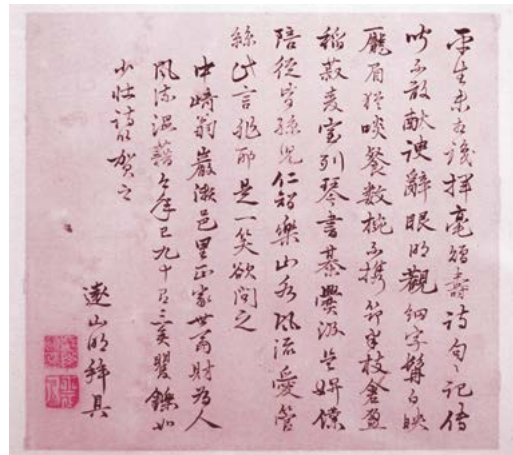
水戸藩士、石川清秋（慎斎・儀兵衛）は水戸彰考館総裁立原翠軒の門人で、八田組の郡奉行を務めました。

下岩瀬村は八田組に属していたのでこの間に藤兵衛と知り合ったのでしょう。水戸藩の代表的な編年史料「水戸紀年」（文政10年成稿）の筆者としても知られています。清秋は藤兵衛に93歳の長寿を祝した詩書を贈りました（写真1）。

このとき、同じく水戸藩士と思われる遠山明も藤兵衛に祝状を贈っています（写真2）。



▲写真1 石川清秋の書幅



▲写真2 遠山明の祝状

◇水戸っぼ・石川清秋の逸話

藤兵衛に書を贈った石川清秋にはよく知られた逸話があります。嘉永2年（1849）、それまで幕府に蟄居謹慎を申し付けられていた9代藩主斉昭の謹慎が解け、幕政への関与が認められるようになると、斉昭は藩内の藩政改革反対派家臣を排除して人事を刷新し、海防のため寺院の梵鐘を没収して大砲を製造するなどの急進的な政策を勧めました。以前から斉昭の政治を支えてきた清秋は、その過激な姿勢に疑問を感じ諫めたところ、斉昭から切腹を命じられてしまいます。他の家臣らが清秋の助命を願い斉昭を取り成すと、斉昭も考えを改めたものの「理由もなく自らの決定を覆すことはできない」として、「清秋自身による助命嘆願があれば切腹を取り下げることができる」とする心境を明かしたといえます。これに対し清秋は、「老齢の身（79歳）で助命をしては家の恥になる」として切腹を受け入れ、身をもって斉昭を諫めた、というものです。藩の記録等には残されていませんが、かつては水戸藩士の子孫の家々に語り継がれてきたという巷説です。主君の非を身をもって諫める忠臣として清秋は、水戸っぼを体現した存在でした。庄屋中崎藤兵衛に漢詩を贈り長寿を祝った水戸藩士石川清秋。二人の交流はどのようなものだったのでしょうか。

謝辞「石川清秋書幅」及び「遠山明祝状」（ひたちなか市・大山富彌氏蔵）は文書館に寄託されています。

【参考文献】清水正健『増補水戸の文蹟』水戸の学風普及会1971年、瀬谷義彦・鈴木暎一「解説（編年史）」『茨城県史料 近世政治編I』1982年

（高村恵美）

■問い合わせ■ 文書館 ☎52-0571